



渋谷区長

長谷部 健

シティプライドを
持てる街
渋谷区をつくる

渋谷区役所の区長室にて

生まれ育った街、大好きな街、渋谷区のために汗をかきたいと決意し、2002年に勤めていた会社を辞めて、NPO活動を始めた。その後、渋谷区議を3期務め、数々の政策を実現してきた。「渋谷が変われば東京が変わる、東京が変われば日本が変わる」。現在は区長として成熟した都市“渋谷”を目指す。

2015年11月5日、東京都渋谷区で全国に先駆け同性カップルに対し結婚に相当する関係を認めた「パートナーシップ証明書」の発行が始まった。性的マイノリティーが普通に生活できるようにするこの取り組みは大きなニュースになった。

そのほかにも、ナイキ社の協力を得て完成した宮下公園の「マイケル・ジョーダン・メモリアルコート」、街全体を学びの場とした「シブヤ大学」、自己責任で自由に遊べる「はるのおがわプレーパーク」など、渋谷区の取り組みでメディアに取り上げられたものは多い。これらはみな、区長の長谷部健さんが、区議時代に議会に提案し実現してきたものだ。

スポーツに熱中した学生時代

渋谷区神宮前で生まれ育った。小学生の頃、原宿では竹の子族が踊っていた。中学生の頃には、渋谷

はせべ けん

1972年3月28日東京都渋谷区神宮前生まれ。佼成学園高等学校卒。1996年専修大学商学部卒業後、(株)博報堂入社。2002年11月NPO法人green bird設立。03年4月渋谷区議会議員に無所属で出馬、トップ当選。以後、3期区議会議員を務める。2015年4月渋谷区長に就任。

発祥のDCブランドが大流行。渋谷から全国へ、「街が持つ発信力」を肌で感じながら育った。

スポーツと読書と音楽に夢中になった10代。勉強は二の次だった。大学入学まで人より2年余分にかかってしまった。

「コンプレックスも感じましたが、でもかえって良かったと思っています。それまではガキ大将でいい気になっていたところ、鼻を折られた。大学で過ごすうち、コンプレックスは消えましたが(笑)」

専修大学ではオーストラリアンフットボール愛好会に所属。激しく体をぶつけ合う球技に熱中した。外国人との交流や、スポンサー企業との折衝の経験など、「この競技を通して得たものは多い」。日本代表としてオーストラリア遠征にも参加し、負けはしたが、ファイト溢れるプレーは地元の新聞にも取り上げられた。



↑ 学生時代、オーストラリアンフットボール愛好会の仲間と。(左端)



↑ 2002年にNPO法人green bird設立。仲間と楽しみながらやる清掃活動の輪は全国に広がっている。

「これは就活のネタにもなりました。面接で、オーストラリアンフットボールって言うと、何それ？
えっ日本代表？って。そこで自分が載っている新聞を見せると、さらに話が弾んで——」

ほとんどの面接は自分のペースで進んだという。

地域の仲間と一緒に社会を変える

卒業後、広告会社の博報堂に入社し、30歳まで過ごす。この時代に得た「コミュニケーションで課題を解決する」発想は、その後の政治活動に活かしている。

「地域のコミュニティを強くする。行政と企業の間の壁を取り払い、結びつける。自分一人で社会を変えようなんて思っていないくて、地域の仲間と一緒にやっています」

「法律を作るだけでなく、街の空気づくりが大切」と考える。区議になる半年前、2002年から始めたNPO法人green birdの清掃活動もその一つ。

「ポイ捨て禁止という条例があっても、ゴミを捨てる人はいる。でも、みんなで掃除してきれいになっている街では、ポイ捨てはできない」

一つ行動を起こすと、そこで人が繋がり、新たな企画が生まれる。本人は「長谷部健の被害者の会」などと冗談で言うが、周りを巻き込んでやってきた。

31歳で区議に立候補したとき、必ずしも政治家としてやっていける確信があったわけではなかった。そもそも「区議会議員にならないか」と地元の友人に誘われたときも、乗る気は全くなかったという。

「90年代、広告業界にいて、ベネトンがエイズ予防の広告を打ち出すなど、社会貢献が今後の流れになると感じていました。その方面での独立は考えたが、政治家になる気はなかった。でも、よくよく考えてみれば政治もソーシャル・プロデュースだなと。30

代の一番脂が乗っているときにそういう仕事に取り組むのも面白いと思いました」

例えば、自動車メーカーをスポンサーに表参道を一日歩行者天国にして、“車に乗らずに手をつないで歩こう”というイベントをしたら盛り上がるだろうなんて——。「自分が育った街をもっとこうしたい」という思いと、それを実現するための具体的なアイデアはあった。あとは走りだけだった。

2003年4月渋谷区議に無所属で出馬するとトップ当選。以後、3期務めた実績が認められ、2015年、前区長から後任の指名を受け、無所属で区長選に立候補。与党、野党の候補者を破り、当選する。

区長として掲げるのは「ちがいを力に変える街、渋谷区」。根底にあるのはダイバーシティの考えだ。

「いろんな人がいて、それぞれの価値が交り合って新しい価値を生み出しているのが渋谷区。和の文化を担保する渋谷もあれば、文化の最先端でもある原宿や表参道があり、そこが街としての強み。生活する人がシティプライドを持てるような成熟した都市を目指す」

そのための仕掛けはいくつも用意している。そして「発信力」のある渋谷区だからこそ、その取り組みは東京へ、そして全国へ波及すると期待する。

学生時代は「将来、毎日スポーツをして過ごしたい」と思ったという。

「戦略を考えて相手を攻略したり、ときには気持ちで体当たりしたり、そういうスポーツが大好きですから」

忙しい仕事の合間を縫って、今もマラソン大会に参加しているが、スポーツ三昧の生活はまだまだ先になりそうだ。でも「戦略的に攻略」「気持ちで体当たり」とは、渋谷区のために今やっていることでもある。